

課題名 F.L.ライトのゴードン・ストロング・プラネタリウムの模型製作

指導教員 中西 章

研究の目的

F.L.ライトの作品の中でも実際には実現されなかったゴードン・ストロング・プラネタリウムの模型製作を行う。この建物は、グッゲンハイム美術館の螺旋状の動線のもとになったとされる作品で、この作品の具体的な姿をあきらかにすることを目的とした。

研究の方法

残されていた立面図・平面図・断面図にもとづいて1/100スケールの模型を製作する。模型は外観のみとし、ドーム状のプラネタリウムの周囲を廻る二重螺旋の道路部分を中心に模型製作を行い、スチレンボードに細かい切り込みを入れて曲面を表現した。実際には実現されていないため、立体にする上で不自然な部分は自分たちで推測した。

研究対象

【F.L.ライト】(1867 - 1959)

アメリカの建築家で、近代建築の三大巨匠といわれる。代表作には、帝国ホテル・落水荘・グッゲンハイム美術館などがある。

【ゴードン・ストロング・プラネタリウム】

1924年にF.L.ライトが設計した螺旋状の道路が周囲を廻るプラネタリウム。大自然の中に建設される予定でプラネタリウムと周囲の景色を同時に楽しめる施設を構想していた。道路は二重螺旋になっていて、上が登りで下が下りになっている。登りの道路には歩行者用の通路も設けられている。



写真1 模型頂上部分

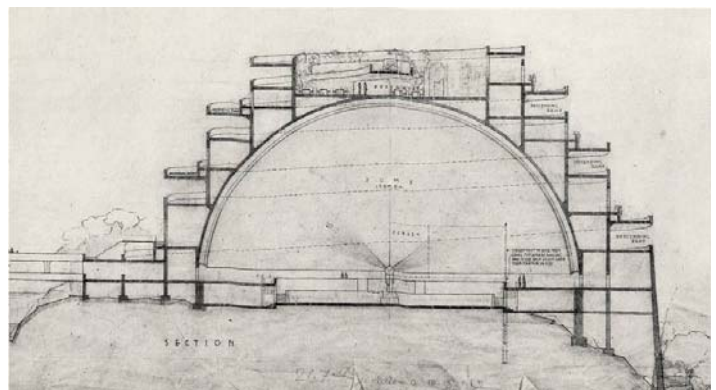


図1 プラネタリウム断面図

考察

頂上部分では、模型を製作する上で図面では理解できない部分があくつか明らかになった。まず屋上部分は図面からは登りから下りに変換するときどのようになるかわからな

かったが、模型を製作して、道路の一部が壁から離れてることがわかった（写真1）。また、図面では一番上の道路にも勾配がついているが、その通りに模型を作ると内側の直線の道路の勾配が急になってしまうため、模型にする際は一番上の道路を水平にすることで下の道路との高さの差をつくった。

今回製作した模型とグッゲンハイム美術館を比べると、螺旋形の動線を用いる点は同じであり、螺旋形の動線の隙間を見せるデザインも共通している。しかし、プラネタリウムが二重螺旋で登りと下りが分かれているのに対して、グッゲンハイム美術館では一重の螺旋となっている。またプラネタリウムが上にいくに従って円が小さくなっていくのに対し、美術館は円が大きくなっていく。さらに、中央に巨大なドームを持つプラネタリウムとグッゲンハイム美術館では、その規模も違っている。

まとめ

模型は写真のようになった（写真2）。模型には現れないが、中央のドーム部分はプラネタリウムになっていて、その周囲に登りと下りの道路が二重螺旋になっている。頂部で登りと下りが入れ替わり、その時に道路が壁を離れる。二重螺旋の動線は後のグッゲンハイム美術館と共通する。

参考文献

- ・ 二川幸夫 編『フランクロイドライト全集 第5巻』（A.D.A EDITA Tokyo）

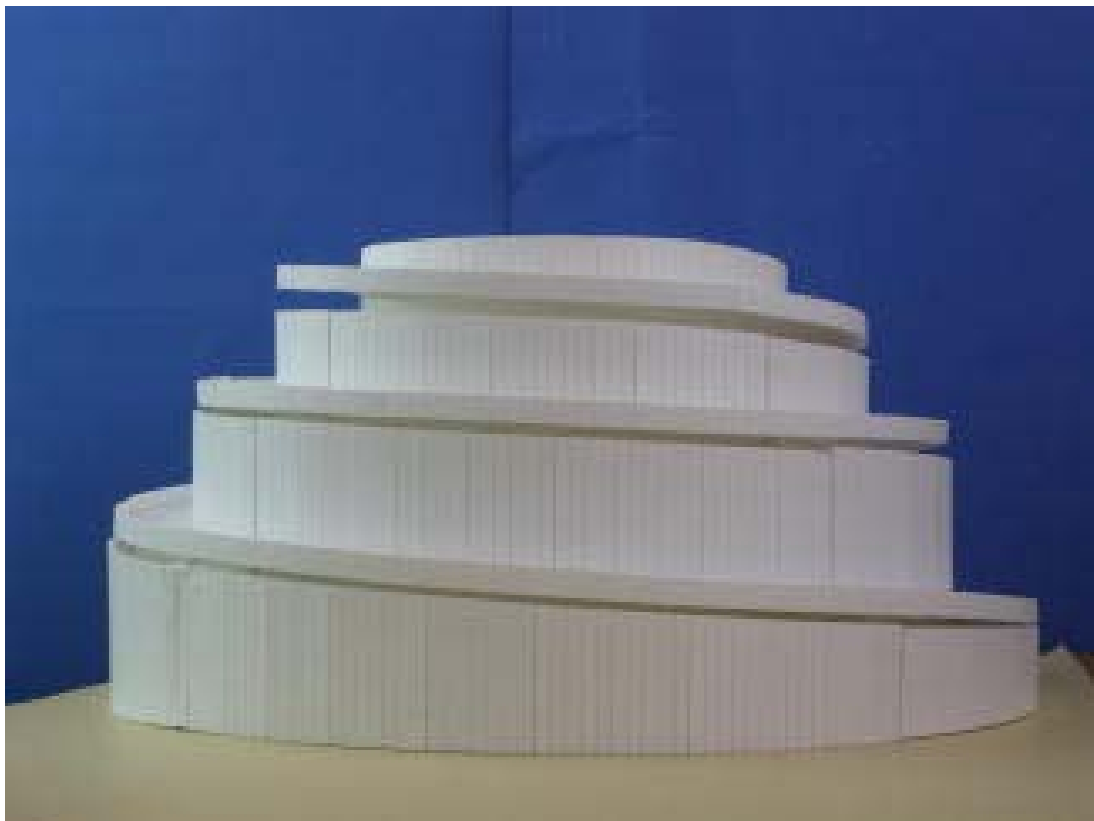


写真2 模型全景